〔東京家政大学博物館紀要　第15集　p.11～23,　2010〕

ライフヒストリーとライフストーリーの相違
― 桜井厚の議論を手がかりに ―

亀﨑　美沙子

The Difference between Life History and Life Story:
Focusing on the Discussion of Atsushi Sakurai

Misako KAMEZAKI

はじめに

本研究の目的は、桜井厚の議論を手がかりに、ライフヒストリーとライフストーリーの相違について明らかにすることである。

ライフヒストリー及びライフストーリー[1)]は、個人の語り、あるいは語りに焦点をあてた研究である。これらは社会学の領域で発展し、心理学、教育学、人類学、歴史学などの様々な学問領域で広く用いられるようになった。しかしながら、ライフヒストリーとライフストーリーについては、明確な区別なく異なる用語として用いられたり、しばしば混同して用いられたりする。明確な区別を設けている場合にも、研究者によって両者を区別する視点は異なっており、呼び方の違いはあるものの、同じ研究方法であるという見方もある。

筆者は、子育て支援活動としての「ひろば」実践に関する研究を進める中で、歴史的背景との関連の中で実践者がどのような地域ニーズを掬い取り、どのような子育て支援の価値観を形成したのかを明らかにする際にはライフヒストリー的な手法を用い、ある特定の出来事に対する実践者の思いや意思決定のプロセスを明らかにする際にはライフストーリーを用いてきた。しかしながら、改めて研究方法について考えるとき、他の研究者がどのようにライフヒストリーとライフストーリーを区別しているのか、今後の研究を進めるにあたり、このことを整理しておくことが必要であると考えた。

そこで、本研究では、社会学において代表的なライフヒストリー及びライフストーリー研究者である桜井厚の著書を手がかりに、両者の相違を明らかにしてみたい。桜井は、ライフヒストリー及びライフストーリーに関する研究を進める中で、ライフヒストリーからライフストーリーへと、研究方法の主軸を移してきた。特に、2002年にはライフストーリーを著書のタイトルに採用しており、この背景には桜井自身のライフヒストリーからライフストーリーへの「方法論的転回」があったことを述べている。このような桜井の著書は、ライフヒストリーやライフストーリー、その他の

児童学科　627資料室

インタビュー研究において高い割合で引用、参照されている。また、これらの2つの研究については様々な立場があるが、桜井の主張する対話的構築主義[2]をとる研究が多い。

このように、桜井の研究は近年のライフヒストリーないしライフストーリーに大きな影響を与えているものである。そこで、ライフヒストリーとライフストーリーの相違を検討するため、桜井の議論を手がかりとしてみたい。ここで主に対象とするのは、2002年に刊行された桜井の著書『インタビューの社会学　ライフストーリーの聞き方』である。本書は著書のタイトルに従来の「ライフヒストリー」ではなく「ライフストーリー」を採用した著書である。この文献を中心に、桜井のライフヒストリーとライフストーリーの違いについて分析する。

1．ライフヒストリーとライフストーリー

本研究で取り上げる桜井厚は、社会学においてライフヒストリー及びライフストーリーの研究を行ってきた。従って、ここで取り上げるのは主に社会学におけるライフヒストリーとライフストーリーであることを断っておきたい。

(1) ライフヒストリーとライフストーリー

ライフヒストリーは生活史と訳され、個人の語ったライフストーリーや、日記や手紙などの文書資料を用いて個人の歴史を再構築したものとして捉えられる。ライフヒストリーには、①実証主義アプローチ、②解釈的客観主義アプローチ、③対話的構築主義アプローチの3つの代表的アプローチがある[3]。①と②はともに社会的現実を重視する点で共通し、①は自然科学を基準にした演繹的で仮説検証型のアプローチ法、②は帰納的に語りを分析して一般化を目指す点で異なる。これらに対して、③はインタビューデータが対話という相互行為によって共同構築されるとの見方に立ち、語りの内容だけでなく、語りの様式にも注意を払うアプローチであるとされる。

一方、ライフストーリーは人生物語や生活物語などと訳され、個人の人生、生活、生などについて語った口承の語りを指す。ライフヒストリー研究においては、その一次資料として位置づけられている。例えば、ライフヒストリー研究の先駆者である中野（1995）は、ライフストーリーとは「本人が自己の現実の人生を想起し述べている」ものであり、このようなライフストーリーを「本人の内面から見た現実の主体性把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し位置づけ、註記を添え」て「仕上げ」たものがライフヒストリーであると述べている[4]。また、浅野（2004）も、「『語り』を研究者が歴史的・社会的文脈に位置づけて再構成し、個人の自己形成過程を社会変動に即して解釈的に描き出した『作品』がライフヒストリー」であり、「再構成される前の個人の『語り』そのもの」はライフストーリーであると説明している[5]。

(2) ライフヒストリーとライフストーリーに関する諸定義

それでは、ライフヒストリーとライフストーリーの区別には、どのような見方があるのだろうか。ここでは、先行研究として、ライフヒストリーとライフストーリーの両方について定義あるい

表1　ライフヒストリーとライフストーリーに関する諸定義

やまだようこ（2000、2006）	ライフヒストリー研究では「大きな歴史の流れのなかでとらえた個人の歴史に関心」をもつ。その一手段として語りが用いられ、「語られた内容の裏づけとして」各種資料や史的考証も重視する[6]。「『ライフヒストリーの社会学』では個人の生活史の再構成が目的」である[7]。ライフストーリー研究はナラティヴアプローチに基づいており、「語りそのものにより関心」をもち、「語られた真実」を重視する。語りは「共同行為、共同制作、共同生成」と考えられ、「語る行為と語られた物語」に着目するだけでなく、「語りの生みだされる状況や文脈、調査者や調査対象者との関係性」にも注意が払われる[8]。「『ストーリーの社会学』では、ストーリーの語られ方、共同行為と、その背後の社会システムに焦点がある」[9]。 ライフヒストリー研究とライフストーリー研究を「研究者の関心がどこにあるか」という点で区別し[10]、さらにマン（Mann,S.J）の主張を引きながら、「ライフヒストリーが人生の歴史的真実を表そうとしているのに対して、ライフストーリーは、生きられた人生の経験的真実を表そうとしている」という見解に賛同している[11]。
平河勝美（2006）	ライフヒストリーを「人生経験が史実、社会状況、社会制度などと関係していることを客観的に確認したり記述しようとする立場での研究」、ライフストーリーを「語り手の用いた言葉や表現様式に語り手の主観世界が込められていることや、語り手と聴き手の相互作用の過程から物語が生成することに着目する研究」と定義している[12]。
蘭由岐子（2006）	ライフヒストリー研究が「ある個人の身の上に起こった出来事の事実性を実証し、時系列にそった線形的な人生を描写することに関心を払う」のに対して、ライフストーリー研究は「語りあるいは語るという行為（story-telling）、そして、語られたものの『ストーリー』としての局面に注目する」のだと説明している[13]。
山田浩之（2006）	「ライフヒストリーとは個人、あるいは少数の集団を分析の対象とし、その人生全体、また人生の一時期を社会的背景や事象と結びつけながら調査対象者の人生と生活を再構成しようとする手法」であり、ライフストーリーを「ほぼライフヒストリーと同じ手法」と位置づけている。そして、「呼称は多様であっても、基本的に個人、または集団の人生や経験を質的資料により構成しようとする手法であることは共通している」と説明する[14]。

は説明している研究を取り上げてみる（表1）。

これらの先行研究では、社会的歴史に個人を位置づけるのか個人の主観世界の把握か、時系列的な生活史の再構成か語りの生成プロセスとその行為か、といった研究の焦点の違いが読み取れる。また、歴史的真実か経験的真実か、事実性かストーリー性かといった関心の違いがある一方、人生や経験を社会背景と関連づけながら、質的資料により構成しようとする点で共通とする見方もある。

このような先行研究に対して、本研究では社会学における桜井厚の議論を手がかりにしつつ、ライフヒストリーとライフストーリーの違いを明らかにしてみたい。近年、社会学におけるライフヒストリー研究は、ライフストーリー研究へとその主軸が移りつつある。冒頭に述べたように、桜井

のライフヒストリー研究においては「方法論的転回」があり、ライフストーリーを重視する立場をとるようになった。この背景には、ライフヒストリーとライフストーリーに対するどのような捉え方の違いがあるのか、このことを中心に以下で検討を行ってみたい。

２．著書に見るライフヒストリーとライフストーリー

まず、著書における用語の整理からライフヒストリーとライフストーリーの相違について探ってみたい。これ以降、次の文献から本文を引用することを断っておきたい。

桜井厚（2002）『インタビューの社会学　ライフストーリーの聞き方』せりか書房

尚、引用文中の下線部は筆者によるものである。

(1) ライフヒストリーとは

まず、ライフヒストリーに関する記述を引用してみたい。

> 【1．ライフヒストリーとは】
> ライフヒストリーはライフストーリーをふくむ上位概念であって、個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したものである（下線部①）。一般的にライフヒストリー研究では、ライフヒストリーやライフストーリー、オーラルヒストリーのほかに、個人的記録（パーソナル・ドキュメント）、人間記録（ヒューマン・ドキュメント）、生活記録（ライフ・ドキュメント）などの用語がよく登場する。後者の三つはいずれもほとんどおなじ意味で使われ、日記や手紙などの文字資料を中心にライフヒストリー資料を包括的に意味する用語である。ライフヒストリーは、ライフストーリーだけでなく他者の話やこうしたライフヒストリー資料、専門的知見のはいった文献史料をくわえて構成された記録である（下線部②）。（中略）ライフヒストリー全体がライフストーリーから構成される場合もある。ライフヒストリーは、対象となる個人の主観的現実を社会的、文化的、歴史的脈絡のなかに位置づけることを主眼としている（下線部③）。（p.58－59）

ここで用いられているライフヒストリーに関する用語は、ライフヒストリー、ライフヒストリー研究、ライフヒストリー資料の3つであり、ライフストーリーについては、ライフストーリーという1つの用法に限定されている。

まず、ライフヒストリーという用語について整理してみたい。ライフヒストリーとは「個人の人生や出来事」を、ライフストーリーや「他者の話」、「ライフヒストリー資料、専門的知見のはいった文献史料をくわえて」「伝記的に編集して記録」したものであるとされる（下線部①、②）。次に、ライフヒストリー資料について考えてみると、「個人的記録（パーソナル・ドキュメント）、人間記録（ヒューマン・ドキュメント）、生活記録（ライフ・ドキュメント）など」と呼ばれる「日記や手紙などの文字資料」として捉えることができるだろう。なぜなら、下線部②

において、ライフストーリーとライフヒストリー資料は分けて考えられており、さらに「専門的知見のはいった文献史料」とも区別が設けられているからである。

最後に、ライフヒストリー研究とは、「社会的、文化的、歴史的脈絡のなかに」個人を「位置づけ」（下線部③）、個人の「主観的現実」を通して社会や歴史を把握しようとする研究であると捉えることができる。社会に生きる個人を対象としつつも、研究の焦点は歴史や社会の把握にあるために、主観的なライフストーリーやライフヒストリー資料だけでなく、「専門的知見のはいった文献史料」を加えて構成されるのである。

(2) ライフストーリーとは

それでは、ライフストーリーはどのように説明されるのだろうか。

【2．ライフストーリーとは】

ライフストーリーは、一般的に、個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリーである（下線部④）。もちろん、人は自分の人生を最初から最後まで完全に語ることはできないから、その人生で意味があると思っていることについて選択的に語るわけである。本書では、おもにインタビュアー/調査者のインタビューによって引き出された語りを想定しているが（下線部⑤）、たまたま発話された人生（生活）を表象する「ひとり言」も、そのひとつと考えてよい。ライフストーリーが文字化されたり、出版されたりしたものが「自伝（オートバイオグラフィ）」である。こうしたライフストーリーは、人類学者がすでに十九世紀末から収集していたものである。しかし、西欧人の調査者は、非西欧人のライフストーリーには、言葉が不確かで時系列的な感覚に欠け、くり返しや文化的きまり文句が多いと見なしていたから、調査者である編者によって再構成されたり修正の手が加えられたりするのが常であった（Kluckhohn 1945）。また、調査者がその対象者についてほかの人から得た情報も、ライフストーリーに追加されて編集されることもあった。そのため、編集されたものを、ライフストーリーと区別してライフヒストリーとよんだ（Langness 1965）（下線部⑥）。したがって、ライフヒストリーの最終的な作品は、調査者の記述がかなりの部分をしめるものから、ほとんどが対象者自身の一人称の語りからなるものまで千差万別である。（p.60－61）

この説明からは、ライフストーリーを「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」であり、口述の、とりわけインタビューによって「引き出された語り」として理解することができる（下線部④、⑤）。これは、【1．ライフヒストリーとは】においても同様であり、このような口述の記録、つまりインタビューの場で個人が語った自分の人生についての語りとして捉えることができるだろう。

また、個人の語りであるライフストーリーは様々に修正されたり、他の情報が加えられたりした

ことから、編集されたライフヒストリーと区別されたことが述べられている（下線部⑥）。

(3) ライフヒストリーとライフストーリーの関係

用語の整理からは、ライフヒストリーとは、個人の人生についてライフストーリーや他の資料を加えて伝記的に編集した作品であり、ライフストーリーはインタビューによって引き出された個人の語るストーリーであることがわかった。ライフヒストリーとライフストーリーをこのように捉えた上で、下線部①の「ライフヒストリーはライフストーリーをふくむ上位概念」であるという記述に着目すると、ライフストーリーはライフヒストリーを構成する際の素材であり、これに他の資料を加えて「伝記的に編集」した作品がライフヒストリーであると理解できる。

したがって、ライフヒストリーとライフストーリーの相違の第一は、作品としてのライフヒストリーと、その素材としてのライフストーリーという2つの関係の中に見出すことができる。これは、対話的構築主義アプローチに対して、従来のライフヒストリー研究における違いであると言えるだろう。

3．ライフヒストリーからライフストーリーへの「方法論的転回」

(1) ライフヒストリーからライフストーリーへ

桜井はこのようなライフヒストリー研究を進める中で、ライフヒストリーよりもライフストーリーを重視するようになり、研究の主軸を移していった。この過程には、どのような認識の変化があったのだろうか。次に、桜井の「方法論的転回」について詳細に見てみたい。

【3．鍵概念の変化】

かつて私は語り手の語りだけに注目していたので、インタビュアーとしての私たちは、ときに省略されたり、簡略化された質問形式に表現を変えて、いわば背景に退くかたちで編集していた（下線部⑦）。第二に、人びとの語りにはある特定のトピックがバラバラと登場するから、たとえば、インタビューの前半で出てきたトピックとおなじトピックが再び後半に登場したときには、かつてはひとつのトピックへまとめるように語りの順序を変更して、わかりやすい編集を心がけていたのである（下線部⑧）。これらは、現在のトランスクリプトでは様変わりしている。インタビュアーの質問は語り手の語りとおなじ位置づけがなされており、インタビューで語られたトピックの継起順序にそってトランスクリプトも作成されている（下線部⑨）。

じつは、この変化はライフヒストリーからライフストーリーへと方法論の鍵概念が変化したこととも対応している（下線部⑩）。ライフヒストリーは、調査の対象である語り手に照準し、語り手の語りを調査者がさまざまな補助データを補ったり、時系列的に順序を入れ替えるなどの編集をへて再構成される（下線部⑪）。それに対し、ライフストーリーは口述の語りそのものの記述（アカウント）を意味するだけでなく、調査者を調査の重要な対象であると

位置づけているところが特徴なのである（下線部⑫）。調査者の位置づけが異なるところに、ライフストーリーをライフヒストリーから区別する大きな理由がある（下線部⑬）。本書の副題も比較的ポピュラーなライフヒストリーという用語ではなく、ライフストーリーを使っているのは、私にとってそのような方法論的転回の意味が込められているからである。（p.8－9）

ここでは、ライフヒストリーからライフストーリーへの「鍵概念」の変化に伴い、インタビューのトランスクリプトが「様変わりした」ことを述べている（下線部⑩）。その変化の第一は、「語り手に照準」し省略されていた聞き手は、「語り手とおなじ」「調査の重要な対象」として位置づけられたこと（下線部⑦、⑨、⑫）、第二は、「時系列的に」順序が入れ替えられたトピックは、語りの「継起順序にそって」トランスクリプトが作成されるようになったことである（下線部⑧、⑨、⑪）。

この2つの変化のうち、「調査者の位置づけが異なるところ」に、ライフヒストリーとライフストーリーの区別を設け、このことを桜井自身の「方法論的転回」と呼んでいる。ラングネスが個人の語りと他の情報を加えて編集したものとを区別するため、ライフストーリーとライフヒストリーとを分けたのに対し（下線部⑥）、桜井は、両者の違いが聞き手の位置づけにあると主張するのである。これが、ライフヒストリーとライフストーリーの相違の第二点目である。

(2) 対話的構築主義におけるライフストーリー

それでは、なぜ聞き手にこのような重要な位置づけがなされることになったのだろうか。また、ライフストーリーは単に「口述の語りそのものの記述（アカウント）」を意味するだけではないことも述べているが（下線部⑫）、対話的構築主義アプローチにおけるライフストーリーとはどのようなものなのだろうか。

【4．ストーリーへの注目と聞き手の位置づけ】

本書が注目しているのは、ライフストーリーには「ストーリー」と表現される特有の局面があることについてである（下線部⑭）。人びとの生活のなかでストーリーはコミュニケーションの中心的な役割をはたしてきた。ストーリーの様式によって、時代や地域性をこえてさまざまな要素や出来事が伝達、伝承されてきた。この場合、それらが事実であるのか想像上の事柄なのかは問題ではない（下線部⑮）。ライフストーリーは、自分の人生（生活）経験を表現するのにもっとも適したコミュニケーションの形態なのである。同時に忘れてはならない局面がある。ストーリーが語られるには、語り手だけではなく聞き手（インタビュアー、聴衆、世間）が必要である。調査インタビューでは、インタビュアーと語り手の言語的相互行為によってライフストーリーが語られ、そのストーリーをとおして自己や現実が構築される（下線部⑯）。方法論的に、ライフストーリーをライフヒスト

リーから分かつ点は、後者が対象者の現実のみを描いて調査者を見えない「神の目」の位置におくのに対して、調査者の存在を語り手とおなじ位置におくということである（下線部⑰）。（p.61）

語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならない（下線部⑱）。とりわけ、語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べる以上に＜いま－ここ＞を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きることである（下線部⑲）、という視点は、対話的構築主義アプローチにおいては基本的なことである。インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場なのである（下線部⑳）。（p.30－31）

桜井が聞き手の位置づけを重視する理由は、ライフストーリーのもつ「ストーリー」という「特有の局面」に注目するからであり（下線部⑭）、ストーリーが語られる前提として聞き手の存在が不可欠であるという（下線部⑯）。つまり、ライフストーリーにストーリーとしての局面を見出すからこそ、桜井は調査者を「神の目」にはできないと考えていることがわかる（下線部⑰）。

さらに「調査者の存在を語り手とおなじ位置におく」理由は、「ライフストーリーを構築する文化的営為の場」としてのインタビューでは、ライフストーリーは聞き手と語り手の「言語的相互行為」によって構築されると考えるからである（下線部⑯、⑰、⑳）。この認識のもとでは、聞き手は語り手とともにライフストーリーを構築する「主体」であるとされ、共同構築された語りは「両方の関心から構築された対話的混合体」であると考えられる（下線部⑱、⑲）。つまり、ライフストーリーには構築性という特性があると考えるため、その一端を担う「主体」としての聞き手は、語り手とおなじ位置づけがなされているのである。

このように、対話的構築主義アプローチのもとでは、ライフストーリーにストーリー性と構築性があることから、ライフヒストリーとライフストーリーの相違が聞き手の位置づけの違いにあるといえる。さらに、従来のライフヒストリー研究と、桜井の対話的構築主義にもとづくライフヒストリー研究との違いは、ライフストーリーの捉え方の違いにあるといえる。つまり、ライフストーリーは前者においてライフヒストリーの素材であるのに対して、後者では相互行為による構築物であるとする違いである。

そして最後に、対話的構築主義アプローチの立場では、語られた内容が「事実であるのか想像上の事柄なのかは問題ではな」く、また「現実が構築される」とも述べている（下線部⑮、⑯）。これは、事実に対する認識の問題であるが、この点については考察にまわしたい。

４．総合考察

これまで、用語の整理とライフヒストリー研究における鍵概念の変化過程から、桜井のライフヒストリーとライフストーリーの相違について述べてきた。その結果、ライフヒストリーとライフス

トーリーの相違には、2つの次元があることがわかった。それは、従来のライフヒストリー研究におけるライフヒストリーとライフストーリーの相違、そして、従来のライフヒストリー研究と対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究における相違である。

そこでまず、それぞれの次元におけるライフヒストリーとライフストーリーの相違を確認し、その上で、ライフストーリーに対する認識の違いがどこから生じるものであるのかを考察する。

(1) ライフヒストリー研究におけるライフヒストリーとライフストーリーの相違

従来のライフヒストリー研究においては、ライフヒストリーが個人の人生を伝記的に編集した作品であるのに対して、ライフストーリーはこれを構成する資料のうち、インタビューによって語られた個人の人生に関する語りであった。つまり、ここではライフストーリーは作品としてのライフヒストリーの素材のひとつであり、ライフヒストリーの下位概念として捉えられている。一方、対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究では、ライフストーリーは単なる口述記録ではなく、ストーリーとしての局面や構築性をもつものであることが強調され、その前提としての聞き手の存在を語り手と同じ位置においている。このアプローチ法におけるライフヒストリーとライフストーリーの相違は、聞き手の位置づけの違いにあった。そして、従来のライフヒストリー研究と対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究との相違は、ライフストーリーの捉え方の違いにあった。

このようなライフヒストリーとライフストーリーの相違は、総じて言えばライフストーリーに対する認識の違いがその本質にある。そこで次に、従来のライフヒストリー研究と対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究それぞれのライフストーリーに対する認識が、どのように相違するのかを考えてみたい。

(2) ライフストーリーの構築性

桜井の主張の最も大きな特徴は、ライフストーリーはインタビューの場で、聞き手と語り手の相互作用を通して構築されるという点であった。それでは、ライフストーリーの構築性とは、どのようなものなのだろうか。

桜井は、インタビューにおけるライフストーリーは聞き手と語り手という2つの「主体」がそれぞれに関心をもちながら、応答を繰り返すことで共同構築される「対話的混合体」であると主張する。ここでいう構築性とは、聞き手と語り手が同じ「主体」として語りを構築するという特徴から、「共同作業における構築性」として捉えることができるだろう。

一方、ライフストーリーが何を表象するのかといった見方との関係で、これとは異なる構築性を見ることができる。桜井は、E.ブルナーが示す3つの生、即ち、①「生活としての生（life as lived)」、②「経験としての生（life as experienced)」、③「語りとしての生（life as told)」は必ずしも一致しないことを踏まえた上で、ライフストーリーが示すものを③の「語りとしての生」であるとする[15)]。この「語りとしての生」は「生活としての生」とは独立した「筋書き」をもつが「経

験としての生」とは関連を持ち[16]、語りが経験を意味づけ、「秩序立てて構造化」するのであると述べている。心理学者としてライフストーリー研究を行うやまだ（2000）も、物語を「ふたつ以上の出来事をむすびつけて考えること」と定義し[17]、語りとは出来事を意味づける行為であるとしている。「語りとしての生」としてのライフストーリーは、経験を組織化して表象したものであるとするならば、これを「表象における構築性」と捉えることができるだろう。

ところで、桜井はライフストーリーには異なる位相があり、＜あのとき－あそこ＞という過去の出来事についての＜物語世界＞と、インタビューにおける＜いま－ここ＞という現在における会話、即ち＜ストーリー領域＞に分けることができるとする。そして「過去の時空間の出来事や体験がインタビューの場という現在の時空間において語られる」と述べている[18]。つまり、「表象における構築性」は語りの「現在性」というもうひとつの特性とも結びついていると考えることができる。

以上のように、従来のライフヒストリー研究と対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究との違いには、語りの構築性に対する認識の違いがあると言える。前述した先行研究においては、ライフヒストリー研究とライフストーリー研究との対比において、ライフストーリー研究の特徴として「共同行為」や「相互作用」という用語で表現されていた。つまり、ここで述べた「語りの構築性」は、対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究とライフストーリー研究に共通するものであるといえる。

(3) 事実の捉え方と語りの妥当性

従来のライフヒストリー研究では、客観性の確保が問題とされ、個人的な語りをいかに客観的なものとし、社会や歴史に位置づけるのかが大きな課題とされてきた。つまり、この立場では、客観的な真実としての「社会的現実」の構築が目指されてきた。

それに対して桜井は、聞き手と語り手の両方の関心によって構築される語りは、様々な状況や文脈の影響を受けて構築されると述べる。例えば、語り手の動機や聞き手と語り手との関係、質問の仕方、ジェンダー、時間的経過などである。また、前述のとおりライフストーリーが「事実であるのか想像上の事柄なのかは問題ではな」く（下線部⑮）、現実は「構築される」と述べている。ライフストーリーが「生活としての生」とも異なり、インタビューという現在において構築されるものであるとすれば、事実や現実についてはどのように考えるのだろうか。

桜井は、ライフストーリーは「価値観や動機によって意味構成された」「主観的なリアリティ」であり[19]、対話的構築主義アプローチのもとでは、「外的一貫性」よりも「信憑性」が重要な意味をもつと主張する。その指標として、個人の中で矛盾のない「内的一貫性」が重要であるという。つまり、客観的事実との間に整合性がなくとも、語り手自身の中で矛盾がなければよい、と言うのである。桜井は、客観的事実よりも「主観的なリアリティ」を語り手の真実として捉え、語り手自身の中で一貫し矛盾のない「内的一貫性」を重要な指標として捉えているのである。

高井良（1996）は、教師研究におけるライフヒストリー研究について、ライフストーリー解釈の鍵概念として、代表性-象徴性、信頼性-真正性、妥当性を挙げている。ライフストーリーは「揺れ

動く」ものであることを踏まえると、このうち、研究者が語り手の経験を「構造化」する際の「解釈の妥当性」が最も重要であると述べ、語り手の固有性や多様性を有する教師のライフストーリーを尊重する「対話的な」姿勢を重視している[20)]。つまり、高井良はライフストーリーの「表象における構築性」を認めた上で、語りそのものの真偽を問うのではなく、それを解釈する際の妥当性を研究の軸に据えているのである。

ライフヒストリー研究において事実をどう見るかは、研究としての妥当性を左右する問題である。しかしながら、見方を変えればライフストーリー自体の真偽の問題、即ち、語られたことが客観的事実かどうかということではなく、解釈における妥当性を担保することができれば、研究としての価値は保障されることになる。高井良の、ライフストーリーは対話によって構築されるものであるとする見方や、構築された語りの内容を尊重する立場は、桜井の主張とも重なるものである。

先に挙げた先行研究においては、ライフヒストリー研究では「歴史的真実」を、ライフストーリー研究では「経験的真実」を重視することが指摘されていた。これに対して桜井の著書では、これらの違いが従来のライフヒストリー研究と対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究の違いとして捉えられていた。つまり、ここでも桜井の主張する対話的構築主義アプローチはライフストーリー研究と共通する見方を示していることがわかる。

おわりに

本論では、ライフヒストリーとライフストーリーの違いについて、桜井の議論を手がかりにミクロなレベルで検討を行った。その結果、従来のライフヒストリー研究においては、ライフヒストリーとライフストーリーには作品と素材といった違いがあり、また対話的構築主義アプローチにもとづくライフヒストリー研究においては、聞き手の位置づけに違いがあることが明らかになった。さらに、従来のライフヒストリー研究と対話的構築主義アプローチにおけるライフヒストリー研究との間には、ライフストーリーの見方の違い、即ち構築性に対する認識の違いや事実に対する捉え方の違いがあることが明らかになった。このような結果から、ライフヒストリーやライフストーリーという言葉の使用をめぐる問題は、必ずしも方法論上の区別を示すわけではなく、それぞれの認識にもとづく立場を示すひとつの指標として、言葉の使い方の違いが生じている可能性があることが示唆された。

桜井の方法論的転回については、やまだ（2006）も言及しており、このことを「ライフストーリー研究」への方法論的転回であるとの見方を示している。つまり、やまだによれば、桜井の対話的構築主義アプローチはライフストーリー研究であるとされている[21)]。その一方で、江頭（2007）は、桜井の主張をライフヒストリー研究のひとつとして取り上げ、桜井と他の研究者との考え方の違いを提示している[22)]。しかしながら、実は桜井は別の著書において、ライフストーリー研究の定義に対話的構築主義アプローチの考え方を採用している[23)]。このことからは、本研究において検討を行った桜井の対話的構築主義アプローチはライフヒストリー研究ではなく、ライフストーリー研究として位置づけるべきではないか、との疑問も生じる。

ところで、山田（2006）はライフヒストリーとライフストーリーとの言葉の使い方について次のような見解を示している。近年のライフヒストリー研究では、ライフヒストリーが研究者の視点で書き換えられた物語であるという立場から、より語り手に近い物語を提示するためにライフストーリーという呼称を用いる場合が多いが、厳密には論文にまとめる作業において、ライフストーリーの編集作業が避けられないことを指摘している。その上で、ライフヒストリーかライフストーリーかといった「言葉の使い方」よりも、語り手と研究者が「対等な立場で相互作用を行うこと」、「編集作業において研究者の分析枠組みや偏見を」語り手の「語りに押しつけないこと」が重要であると述べ、自身はライフヒストリーという呼称を用いている[24)]。

筆者も基本的にこの意見に賛成である。しかしながら、これらの言葉を研究方法として用いるならば、自分なりに整理した上で自らの立場を明確にしていく必要があると考える。そのために、今後は社会学に限らず他の分野における研究を含めて、どのような目的でそれぞれの研究をライフヒストリーあるいはライフストーリーとして使い分けているのかを整理する必要があるだろう。その上で、今後の研究においてライフヒストリーかライフストーリーかといった言葉の選択や、研究目的との適合性について検討したい。

註

1) 同様の研究方法としてオーラル・ヒストリーがある。これは、主に政治史研究の他、民衆史、社会史等の歴史研究において用いられ、文書資料に頼ってきた反省から口承の資料であることに強調点をおいた「オーラル」という用語が用いられている。
2) 対話的構築主義とは、実証主義や解釈的客観主義に対する桜井の主張であり、語りは聞き手と語り手の相互行為によって、また、インタビューの場において構築されるものであるとする立場。
3) これらはいずれも桜井厚の分類によるものであり、対話的構築主義とは、桜井の造語である。
4) 中野卓.“歴史的現実の再構成 個人史と社会史”. ライフヒストリーの社会学. 中野卓・桜井厚編, 弘文堂, 1995, p.192.
5) 浅野信彦.“教師教育研究におけるライフストーリー分析の視点－学校の組織的文脈に焦点をあてて”. 文教大学教育学部紀要. 2004. 38, p.83-93.
6) やまだようこ.“第6章 ライフストーリー研究－インタビューで語りをとらえる方法”. 教育研究のメソドロジー. 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編. 東京大学出版会, 2006, p.196.
7) やまだようこ.“人生を物語ることの意味:なぜいまライフストーリー研究か?”. 教育心理学年報. 2000, 39, p.152.
8) やまだようこ. 前掲書. 2006, p.196.
9) やまだようこ. 前掲書. 2000, p.146-161.
10) やまだようこ. 前掲書. 2006, p.195.
11) やまだようこ. 前掲書. 2000, p.152.
12) 平河勝美.“看護実践能力の研究におけるライフストーリー/ライフヒストリーの適用可能性”. 神戸大学発達科学部研究紀要. 2006, 14(1), p.62.
13) 蘭由岐子.“社会学的生活史研究の現在－『ライフヒストリー』から『ライフストーリーの社会学』へ－”. 歴史科学. 183. 大阪歴史科学協議会, 2006, p.3.
14) 山田浩之. 子ども社会研究におけるライフヒストリーの可能性. 子ども社会研究. 2006, No.12, p.124-141.

15）桜井厚. インタビューの社会学　ライフストーリーの聞き方. せりか書房, 2002, p.31-32.
16）桜井厚. 前掲書. p.34.
17）やまだようこ. “第6章　ライフストーリー研究”. 教育研究のメソドロジー. 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学. 東京大学出版. 2006, p.194.
18）桜井厚. 前掲書. p.129.
19）桜井厚. 前掲書. p.39-40.
20）高井良健一. 教師のライフヒストリー研究方法論の新たな方向－ライフストーリー解釈の正当化論理に着目して. 学校教育研究. 1996, No.11, p.65-78.
21）やまだようこ. 前掲書. 2006, p.197.
22）江頭説子. 社会学とオーラル・ヒストリー. 大原社会問題研究所雑誌. 2007, No.585, 法政大学大原社会問題研究所, p.16-17.
23）桜井厚. “ライフストーリー研究におけるジェンダー”. 新版　ライフヒストリーを学ぶ人のために. 谷富夫編. 世界思想社. 2008.
24）山田浩之. 前掲論文. p.138, 注(5).

謝辞

本論文の執筆にあたり、貴重なご助言をくださった研究チームの皆様に厚く御礼申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費補助金の助成を受けて行ったものである。（基盤研究（C）「戦後日本における保育者のライフヒストリーに関する研究」課題番号20530748　研究代表者:岩崎美智子）